

## もふもふ大好き家族が聖女召喚に巻き込まれる2

〜時空神様からの気まぐれギフト・スキル『ルーム』で家族と愛犬守ります〜

## 華憐

異世界に召喚された聖女。  
自分勝手に我が儘。

## ルージュ

クリムゾンジャガー。  
優衣と従魔契約を  
結んでいる。

## 晃太

優衣の弟。日本では  
私鉄の運転手として  
働いていた。

## 水澤優衣

聖女召喚に巻き込まれて  
家族を失って異世界に  
飛ばされてしまった水澤家の長女。  
日本では看護師として働いていた。

## 龍太

優衣と晃太の父親。  
日本では業務用台所の  
設計をしていた。

## 花

水澤家の愛犬。

## 景子

優衣と晃太の母親。  
水澤家の家事を一手に担う。

## ビアンカ

フォレストガーディアンウルフ。  
優衣と従魔契約を結んでいる。

❀ CHARACTERS ❀

## 序章

「今日の書類はこれで最後か」

「はい」

ディレナス王国、副大臣ヒュルト・リン・ディレナスは眉間の皺しわを伸ばす。

二ヶ月前、あの『聖女の厄災』やくさいが起きてから、ヒュルトは多忙を極めた。

だが、自分だけではない。みんな、一様に多忙だ。

入口に控えていた騎士が来客を告げる。

「通せ」

入ってきたのは白髪の男性。

「どうした、フィリップ？」

厳しい顔で入室した白髪の男性——フィリップは、『火鬼』フレデイトモの異名を持つ、この国の第四騎士団の団長だ。子供が見たら泣き出すほど険しいその顔には、右頬から首にかけて火傷痕やけどが広がっている。

「あの愚か者どもはどうしているっ？」

「ああ、バカどもか」

鬼のような形相のフィリップに、ヒュルトは冷静に返す。

「座れ、フィリップ」

「どうしている？」

着席するなり、フィリップは再び尋ねたのだった。

二ヶ月前、異世界から召喚した聖女をお披露目するための巡礼に、フィリップは第四騎士団の団長として参加した。

息子のエリオールから話は聞いていた。第一王子アレクシアン主体で執りおこなわれた『聖女召喚』により呼び出された聖女とその母親、弟、妹。その四人に、国王の側室がマナーの指導をしているが、進捗は芳しくない。

だが想像以上だった。あまりに品のない聖女一家に、巡礼中、フィリップの怒りが何度爆発しそうになったことか。

我慢したのは、聖女一家に振り回されながらも、職務を全うしようとする世話役のメイドやギルド職員達を見ていたからだ。彼らがこうして頑張っているのに、自分が怒りを爆発させるわけにはいかない、と。

だが、一度でもいい、聖女一家をぶん殴っておけば、こんなことにはならなかった。そう痛感している。

行く先々で、男をひっかけ、娼婦とみまがうばかりの聖女とその妹。己の年を考えない派手な母親。あり得ないほどだらしな弟。

苦勞して指導した教師の思いを踏みにじるようにして、聖女の巡礼は進んだ。

ディレナスの誇る薬草園について丁寧の説明する職員を無視し、暑いだとかつまらないだとか繰り返す。

あげく最上級破壊魔法を放ったのだ。

あの時、フィリップは別件で呼ばれ、聖女一家から離れていた。そのわずかな隙に、厄災が起きた。いや、起こされた。

爆発の余波で一瞬気絶したフィリップ。意識を取り戻し、見たものはまさに地獄だ。

巻き上がる炎、吹き荒れる風、引き裂かれた大地、逃げ惑う人々。

煤と血で汚れた人達を助けるため、フィリップは走った。走りながら見たのだ。

「汚い手で触らないでよッ」

熱さでもがき苦しむ人々の手を、聖女——華憐は足で蹴った。

怒りが爆発しそうなフィリップを踏みとどまらせたのは、これまで黙って職務に徹していたメイド達だ。彼女達は聖女一家を石で殴って気絶させ、そのまま放置し、怪我人の救助に走り出したのだ。

その姿に、冷静さを取り戻したフィリップは、自身の魔力を操り、燃え上がる炎がこれ以上広がらないよう制御し続けた。大火傷を負いながら。

鎮火したのは、天の恵みのおかげだ。降り出した雨に、フィリップは心から感謝した。「雨の女神よ、あなたの涙に感謝します」

意識がそこで途絶えた。

数日間不眠不休で走り回り、『火鬼』の異名を持つフィリップの体もさすがに限界だったのだ。意識を取り戻したのは三日後。

治療院のベッドの上だった。

目覚めるやいなや、止める治療院の職員を振り切り、フィリップが向かったのは王城だ。そして、ヒュルトの執務室に怒鳴り込んだ。

「ヒュルト、あのバカどもを出せッ、切り刻んでやるッ」

疲労を顔に深く刻んだヒュルトは、怒り狂うフィリップに安堵の表情を見せた。

「まだ、そんな気概があったか」

以前、大怪我が原因でほぼ引退が確定していたフィリップは、一時自棄を起こしていた。だが新たに開発された薬——抗生剤のおかげで治療し、再び騎士の鎧を身に纏うことができた。

ヒュルトは今回の件で、フィリップが再び自棄を起こすのではないかと案じていたのだ。

「フィリップ、切り刻みたいと思っているのがお前だけであるはずがないだろう？」

ヒュルトは人払いをして、フィリップを座らせ、自らも向かいに腰を下ろす。

「いいか、お前が救助に走り回り、その後眠っている間にいろいろあった」

まず、聖女一家を拘束。一ヶ月前にダンジョンから発見された魔封じの枷を、メイドに殴られ気

絶している間に嵌めた。これは攻撃魔法だけを封じるものだ。

聖女一家の後見人となっていた第一王子は廢嫡、王城の一角にある塔に一生涯の幽閉が決まった。ヒュルトは救助の指示を出す合間を縫って、地下牢に放り込まれた聖女一家に会いに行った。

「私は聖女なのよ、早くこんなところから出さないよッ」

喚き散らす聖女、華憐。

金色の髪の毛は黒くなっている。

無表情に見つめるヒュルトに食ってかかる、職業・大魔導師の母親。

「こんな汚い場所から早く出さないッ、私を誰だと思っているのッ、宮野沢グループの創始者の娘よッ」

髪を振り乱す母親に、かつての若々しい姿はない。

ヒュルトは鼻で嗤う。誰の娘か知らないが、この世界では通用しない。おそらくその『創始者の娘』という立場で前の世界では大きな顔をしていたのだろう。

「くせえんだよ、早く出せよッ」

悪態を吐いて鉄格子を蹴り、唾を飛ばす、聖騎士の弟。

水色の髪の毛は黒くなっている。

「早く出さないよッ、汚いのよこはッ。寝れないしッ、まともなご飯は出ないしッ」  
牢に入れられているのにあり得ない不満をこぼす大賢者の妹。

真っ赤な髪の毛は黒くなっている。

ヒュルトは喚き散らす聖女一家を一瞥し、牢を出た。

その時のことを思い出しながら、ヒュルトは口を開く。

「フィリップ、私はあの者達を最大限使い潰すつもりだ」

「はあ？ 処刑せんのか？」

「そんなことしても、一時的な対応にしかならないだろう？ 最終的に処刑するにせよ、それまでの間、ギリギリ死なない程度の食事を与え、人々に回復魔法をかけさせ、大地を再生させる。今、嵌めさせている魔封じの枷には、自殺防止の付与もあるしな」

ヒュルトの顔には、鬼も怯むような凄みがあった。

「ただでは死なさん。搾り取るだけ搾り取り、使用不可能になるまで使い潰す」

「あれが他人に回復魔法なんてかけるものか」

吐き捨てるフィリップ。あの時、必死に助けを求める人達の手を、華憐が蹴ったのを見ていたからだ。

「それがな、かけているんだよ」

「はあ？」

「食事だよ。一日働いたら、これくらいのスープを食事につけている」

ヒュルトはカップに半分ほど入っているお茶を示す。

「当然、誰か一人だけが回復させても、スープはつけん。全員が働いて一杯だけだ」

一日黒パン一個しか食べられない華憐達は、スープを手に入れるために仕方なく回復魔法をかけ

ている。もし誰か一人でも文句を言おうものなら、連帯責任で全員黒パン一個生活だ。喚こうが怒鳴ろうが、誰も聞かない。

「ギリギリまで使い潰し、このまま生きたい、死にたくない、そう思う頃に処刑してやる」

そんな話をしたのは二ヶ月ほど前。

今日再び執務室にやってきたフィリップは、聖女一家の様子を尋ねる。

「あいつらは反省などしとらんだろう？ 回復魔法といっても大した効果もない。ユイさんの開発した薬のほうの人々を救っている」

「確かに、な。それをどうやって耳にしたが知らんが、こんなことをのたまったよ」

「だったら、優衣ちゃん達にも責任を取らせる。同じ日本人としての連帯責任だ、と。」

優衣ちゃん達が私達と一緒に注意さえしてくれたら、あんな魔法は使わなかった。だから、悪いのは全部優衣ちゃん達だと。

聖女召喚に巻き込まれただけでもかかわらず、家族で支え合い、自活の道を模索していた水澤一家。聖女達はこれまで、ただの一度さえ水澤家の生活を気にかけたことはなかったのだ。

それなのにこんな時だけ連帯責任を求める聖女一家に、ヒュルトは呆れてものが言えなかった。

そもそも魔法兵団長が、使っているのは簡単な初歩魔法だけだと何度も言っていたのに、最上級破壊魔法を使ったのは、聖女一家だ。いい年して、聞いていない、知らないと言い張る聖女一家は、あまりにも見苦しかった。

ヒュルトはフィリップに、ユイ一家が巻き込まれて召喚されたことを説明した。真面目に自立しようとしていたあの一家は、同じタイミングで召喚された聖女一家との接触をとにかく避けていた。まったく違う世界に召喚されて、右も左もわからない土地で、それでも知り合い同士で助け合うことを拒んだユイ一家。なぜそうしたか、今ならわかる。下手に関係を持っていたら、自分達に火の粉が降りかかるからだ。だから、ユイ一家は、聖女一家との接触を拒み続けた。

聖女一家の無責任な発言に、ヒュルトはなぜ、ユイ一家があれほど嫌がったのか実感した。そして彼女達が国を出た理由を悟った。

ユイ達が残した手紙は、無事ヒュルトに届いていた。ヒュルトが一方的な召喚の慰謝料として渡した百万Gも同封してあった。これまで面倒を見てくれたことへの感謝の言葉や、監視役だった騎士のデイドリアンとイーリスを叱らないでほしいことなどが書いてあった。そして、国を出る最大の理由は、華憐達がいずれトラブルを起こした時、それに大事な家族を巻き込みたくないからだ。

その後、城の図書館の司書より、聖女一家によつて禁書が何ページか破り取られていたと報告があった。それを聞き、ヒュルトは早馬を飛ばして魔封じの枷を聖女の巡礼先に届けさせたのだが、間に合わず、大惨事だ。

「ユイさん一家に責任がある？ 斬っていいか？」

フィリップの顔にわかりやすく怒りが浮かぶ。フィリップが騎士として復帰できたのは、優衣が鑑定能力の高い父——龍太に頼んで開発した抗生剤のおかげだった。もちろん抗生剤だけの力では

ない。優衣が自棄になっていたフィリップに親身に寄り添い、処置を続けたからこそ、治癒に至った。いかつい顔のフィリップは、若い婦女子に避けられがちだが、優衣は他の患者と同じように接してくれた。

フィリップにとつて優衣は、騎士として復帰させてくれた恩人というだけではない。誰にでも平等に接する彼女の姿に尊敬とも、思慕ともつかない思いを抱いていた。

つまり優衣は、フィリップの大事な人だ。

「落ち着け、フィリップ。だが、このままでは遅々として復興は進まんから、ちょっと人參をぶら下げる。協力してくれ」

「協力？」

「ああ、バカと鉄は使いようだ」

## 第一章 これから

私達——水澤一家はギルドの建物を出る。

はあ、なんだか、短期間にいろいろあったなあ。

聖女召喚に巻き込まれ、気がつけば異世界の国ディレナスに。その後、あの華憐がなにかやらかすだろうからと、こっそり出国。

いろいろあったけど、移動のために雇った冒険者パーティの『鷹の目』の皆さんは、とてもいい方達だった。途中で神様からのスキルの追加もいただけたし、なにより最大の変化は、新しい家族が増えたことやね。

「ミズサワさん、これからどうされますか？」

旅の途中で知り合った行商人のパーカーさんが、心配そうに聞いてくる。

「とりあえず、宿を探します。これからのことはそのあと考えるつもりです」

「そうですね。私達は明日発ちますが、どうかお気をつけてください」

マーファで仕立て屋をしているというパーカーさんは、声を潜める。

「ユイさん、あなたがあの二匹を従魔にしたことはいずれ知られることになります。そうなればあの二匹目的でよからぬ連中が声をかけてくるでしょう」

「はあ」

首を傾げる私。

「ビアンカとルージュが欲しいと？」

旅の途中で出会い、新たに家族になったもふもふ達。『魔の森の守護者』と呼ばれるフォレストガディーアンウルフのビアンカ。通ったあとは血の道ができると言われるクリムゾンジャガーのルージュ。そして、その子供達。

「はじめは甘い言葉を囁いてくるでしょうね。丸め込まれて、従魔の権利を渡すなんてことにならないように気をつけてください」

え、そんなことできるの？

『あり得ないのです』

『よからぬ気配がマスターに近づけば、切り裂いてやるわ』

『そうなのです、息の根を止めるのです』

やめて、ビアンカ、ルージュ。怖いから。あとでいろいろ約束事を増やさないと。

「はい、ありがとうございます。気をつけます」

「では、これで私達は失礼します。短い間でしたがお世話になりました。マーファにいらしたら、ぜひ私どもの店に来てください。西通りで店を出しています。西通りに仕立て屋は私達の店一軒しかありませんから」

「ミズサワさん、お世話になりました」

「はい。パーカーさん達もお気をつけて」

パーカーさんと、その息子さんジョシユアさんに挨拶。

パーカーさんが雇った冒険者パーティ『山風』の皆さんも声をかけてくれる。

「ユイさん、変な連中が声をかけてくるかもしれないわ。気をつけてください」

そう言ってきたのは『山風』のリーダー、ロッシュユさんだ。

「はい、ありがとうございます。ロッシュユさん。ビアンカとルージュ、その子供のヒスイ達は誰にも渡しませんから」

「いや、あのですね。まず、主人のユイさんを手に入れようとしてきますよ」

「そうなんです」

『そんなことさせないのです』

『ええ、近づかせないわ』

ビアンカとルージュが頼もしい。

「はい、気をつけます」

「では、俺達もこれで」

『山風』の皆さんもギルドをあとにする。

「マーファでミスサワさん達がレストランを開いたら真っ先に行きますっ」

「常連になるっすっ」

見習い冒険者のマアデン君とハジェル君もそう言っって手を振りながら去っていった。

「ユイさん」

次に声をかけてくれたのは、ここまで護衛してきてくれた冒険者パーティ『鷹の目』のリーダー、ホークさんだ。

「あ、リーダーさん、長い間お世話になりました」

「いいえ、こちらこそ。ユイさん、繰り返しになりますが、本当に気をつけてください。あと、従魔として本契約をしたのなら、やはりユイさんも冒険者ギルドに登録したほうがいいですよ」

「え？」

「冒険者ギルドにユイさんの従魔として登録したら、他の者は手を出せません。手を出したら、罪に問われます。ただ、ある程度はそれで守られますが、それでも言い寄ってくる者はいらねえです。くれぐれも気をつけてください」

「そ、そうなんですか？ わかりました。明日ギルドに行くので登録します」

しかし、冒険者かあ。若ければなんとかなるかもしれないけど、もうアラサーだからな。

確か冒険者もピンキリだったはず。町の雑用とかをメインで受ける手もあるかな。身分証代わりに登録する人もいるって聞いたし。

「ユイさん、大丈夫？」

見習い冒険者のエマちゃんも心配そうにしている。

「エマちゃんありがとう、大丈夫よ」

ディレナスからここまで護衛してくれた『鷹の目』の皆さんに、家族でお礼を言う。

「長い間ありがとうございました」

「ミズサワさんご家族に、どうぞ始祖せその神のご加護がありますように」

ヒーラーのチュアンさんが祈ってくれた。ヒーラーというより、モンクみたいなチュアンさん。食事の時いつも、丁寧にお祈りしてくれる。強面こわもてな見た目に反して甘いものがお好きなんだよね。

「これから妙な連中が絡んでくるかもしれません、どうか気をつけてください」

魔法使いのマデリンさんも心配そうに言ってくれる。まさに私がイメージするとおりの魔法使いの綺麗なお姉さん。

「うう、ミズサワさん達の専属護衛なら、ずっとケイコさんのご飯が食べられたのに」

ミゲル君はちよつと悔しそうな顔。母、景子けいこが嬉しそうに笑う。

「ユイさん、これからどうするの？」

エマちゃんと、その後ろにはエマちゃんと同じように心配そうな顔をしている双子の兄のテオ君。

「なんとかなるよ。大丈夫よ」

『鷹の目』の皆さんは数日、この街——アルブレンに滞在するらしい。

挨拶を終え、『鷹の目』の皆さんは、リーダーさんを先頭にして去っていった。エマちゃんとテオ君が心配そうに何度も振り返ってくれる。

それを見送ったあと、気を取り直して母に尋ねた。

「さて、お母さん。残金は？」

「八十万Gゴールドくらいかね」

宿代にいくらかかかるかわからないけれど、残金こごんが心許こころもとない。今日買い取りに出したあの熊にかけるしかないか。

私達の貴重な収入源は、現代日本で売られている蜂蜜等の転売だが、今回は無理だ。

騒ぎを起したばかりの商人ギルドで蜂蜜を買い取ってほしいなんて言えない。

「とにかく宿や」

私は弟の晃太こうたと一緒に宿案内所に向かう。

「すみません」

「はい」

感じのいいおばあちゃんだ。ああ、さっきの商人ギルドの職員と雲泥うんでいの差。

「成人四人、小型犬一匹、中型犬三匹、中型猫二匹、超大型犬一匹、超大型猫一匹です。泊まれる

ところ、ありますか？」

おばあちゃんの頭に「？」が浮かぶ。

「あの、ちよつと事情があります。晃太、ちよつと連れてきて」

「え、ビアンカとルージュ？」

「子供のほうたい」

ビアンカとルージュが来たら、このおばあちゃんの寿命、縮みそうだから。

「ん、わかった」

晃太が呼びに行く前に、来ました。ビアンカの第一子、元氣げんきが。案内所に飛び込んできて、カウ

ンターにジャンプジャンプ。

「クンクンツ」

「まあ、かわいい」

おばあちゃんは笑顔。良かった。

ルージユの第二子、ヒスイも来たので抱っこして見せると、おばあちゃんはかわいいの連発。猫派かな。

「まだ他にも、この仔達サイズがいて、その母親もいるんです」

これくらい、と背丈を手で示す。

おばあちゃんは一瞬固まったが、すぐに台帳のようなものを広げる。

「でしたらコテージタイプで、広めの庭付きがございます。少々値が張りますが」

「おいくらですか？」

「一泊九万Gコテージです」

高いが、背に腹はかえられぬ。花と五匹の仔達が走り回れる庭付きがいい。

必死にジャンプする元気を晃太が抱える。

「重かあ」

しかも、じたばたしてるから大変そうだ。だが、頼むばい。私じゃ元気は無理。ヒスイでも重かもん。元気は晃太をペロペロしている。

「お願いします」

「では、こちらの木札をお持ちください。係の者に案内させます」

おばあちゃんから木札を受け取り、外に出る。出る前に、おばあちゃんがちょっとヒスイを触りたそうにしていたから、勧めると嬉しそうに笑う。

優しく背中を触るおばあちゃん。

「本当にかわいらしい。こんなにかわいい仔、初めて見ました。なんて綺麗な目なんでしょう」

「ヒスイっていいます」

私も鼻が高い。

「みゃあ」

「ふふ、素敵な名前ですね」

私はますます嬉しくなった。おばあちゃんにお礼を言つて案内所を出る。

案内係の人は、若い女性、いや女の子だ。ピアンカとルージユに引いていたが、しっかり案内してくれた。

コテージを管理している宿に木札を出すと、今度は宿の人が案内してくれる。案内して、しっかりと案内しとルージユに引いていたが、冷や汗を流しながらも案内してくれた。

うん、ログハウスだ。

一階が広く、トイレと台所あり。シャワーブースのみでお風呂はないが、近所に公衆浴場があると教えてくれた。あとは寝室、二階にはロフト。庭は広く、周囲は背の高い柵でしっかり囲まれている。

「宿泊を延長したい場合はどうしたらいいですか？」

「最終日のお昼までに受付に申し出ていただければ大丈夫です。ここは今月いっぱい予約が入っていませんので」

「ありがとうございます」

二泊分は支払い済み。

さて、今から緊急家族会議や。

庭を見て興奮した我が家の愛犬——花が、母の腕から降りて走り回る。元気、ルリ、クリス、コハク、ヒスイも。うんうん、かわいかね。

「さて、これからのことを話そうかね」

私は外から見られない位置にある居間で、私だけが持つスキル『ルーム』を開けることにする。

ルームの出入口となる扉は亜空間に繋がり、スキル保有者である私にしか開閉できない。ルームの中には外界の影響を受けないし、生命体を入れたまま移動することも可能だ。ルームの扉を閉めた状態で私が移動すれば、ルームごと中に入っている人達も移動する。だから私達はディレナスから逃げてこられた。私達は黒髪黒目で、この世界では決して珍しくないが、小型犬の花の存在は目につきやすい。そのため、『ルーム』を使用してディレナスを脱出することとなった。

スキル『ルーム』を発動させようとしたら、ルージュが待ったをかけた。

「待って、こちらを窺う気配があるわ」

「え、本当？」

『間違いないわ』

『ええ、私も感じるので』

さすが野生。

なんでもルージュにはこういった気配をキャッチするスキルがあるらしい。もちろんピアノカにもあるが、ルージュはより精度が高いとか。

『体調が良ければ、この街の倍くらいの範囲で気配の把握ができるわよ』

「あ、そうなん、すごかね」

よくわからないけど、きつとすごかね、だよね。

「どうしようか？」

『マスター、消してきましょうか？』

消すってなに？ 息の根？

「やめて。こちらになにかしてこない限り、手を出したらダメやからね」

こういったことも話し合っておかないとね。

さて、どうしよう。ルームを開いている間に、ログハウスに侵入されたらやだなあ。

『見られたくないのよね？』

「そうやね。誰かこっちに残って」

『必要ないわ。ちよつと待って』

ルージュが庭に出る。

「なんばしようど？」

『防御魔法なのです』

ビアンカが説明してくれる。

そういえば夜営地でも、光魔法を使っていたけど。

「ビアンカも魔法を使えたりする？」

『使えるのです。ただ、私は攻撃系が得意なのです。ルージュはこういった防御系が得意なのです。もちろんルージュも攻撃魔法を使えるのですけど。ルージュは防御系の種類や手段が上なのです』

「へえ」

ルージュが顔を上げると、ログハウスを薄くて黒いカーテンのようなものが覆う。

おお、すごか。

成り行きを見守っていた父も母も、晃太も口を揃えて、「すごかあ」です。

『ふう、さすがにちよつときついわね。でも、これでしばらく侵入されないし、声も漏れないわ』

「だ、大丈夫ね？ 休むね？」

そうだ、ルージュはまだ衰弱状態なんだ。

『大丈夫よ』

ルージュがトコトコ戻ってくる。

一度庭に出たので、母がルージュの足を拭いている。

とりあえず安全みたいなので、ルームのドアを、幅の広いビアンカでも入れるサイズにして開

ける。

「さ、どうぞ」

『元氣、ルリ、クリス来るのです』

『いちっしやい、コハク、ヒスイ』

元氣以外はすぐに来た。花は晃太が捕獲。

走り回る元氣を食パンで誘導。

全員、無事にルームに入った。

【従魔の入室確認。従魔の部屋、追加されます。それに伴いスキルが追加されます】

なにかが増えた。

ぼよん、と音がして、新しく部屋ができる。

かなり広いけれど、ドアはなく、柵のみで丸見え状態だ。水飲み場もある。柵はあれだ、子供用の侵入防止の柵だ。壁には小ぶりの液晶画面が張り付いている。

液晶画面をチェックする。

従魔の部屋

残金 19193

残金は、ルーム本体の残金と連動してるみたい。

『これがルームなのですね』

『不思議ね。ここから外の気配はわかるのに、外から中の気配がわからないなんて』  
ピアンカとルージュがキョロキョロしている。

「わんわんっ」

花が吠える吠える。

ルームに置いていた花のおもちゃが、あつという間に元気達に持っていかれる。  
花のおもちゃは基本的に音が鳴るため、一斉にピポピポと奏でられて賑やかだ。

「花ちゃん、新しいおもちゃ買うけんね、ちよつと我慢しい」

吠える花に晃太がすりすり頬擦りしている。

ピアンカもルージュもルーム内の匂いをあちこち嗅いでいる。

「お母さん、まず、ご飯にしようか」

「そうやね」

大騒ぎの夕食を済ませた頃には、ぐったり。

台所にピアンカとルージュが入ってくるわ、元気とコハクは走り回るわ、ヒスイは私の足をよじ

登ろうとするわ、花は吠えるわ。ルリとクリスも、うちの母の足元に陣取っている。

新しくできた従魔の部屋に五匹の仔達を入れる。鳴く鳴く、吠える。ごめんよ、台所は危ないんだよ。包丁でも落としたり大惨事だよ。

従魔の部屋の柵はピアンカとルージュには効果なし。まるで柵なんてないかのように出てきた。高さに簡単に飛び越えられるよね。

私達のご飯を食べる時も、ピアンカとルージュが迫ってきて大変だった。脚の低いテーブルだとつまみ食いされそうになることがわかったけれど、ダイニングテーブルを揃える予算がない。

バタバタの夕食後、お腹ぼっこのりの五匹の仔が転がっている。

私はスマートホンをかざしてカシヤカシヤ。そう、私はスマホを持っている。もちろん圏外だし、電池切れしていたが、スキル『異世界への扉』でスーパーのディレックスに行つて無事に充電器をゲット。

カシヤカシヤ、カシヤカシヤ。

あははーん、かわいかあ。

元気とコハクは天井を向いて脚は全開。あははーん、男の子全開。かわいかあ。カシヤカシヤ。ルリとクリス、ヒスイは仲良く並んでうつ伏せ。あははーん、お尻がブリつとしてかわいかあ。カシヤカシヤ。

十分カシヤカシヤした。

おねむモードになった花も、カシヤカシヤ。

それから、家族会議を開く。

「さあ、始めるよ。ビアンカ、ルージュ、来てん」

『マスター、なにを始めるのです？』

「まず、そのマスターからどうにかせんとねえ」

首を傾げるビアンカとルージュ。

『マスターはダメなのですか？』

『母が、従魔になったらマスターと呼ぶようになって』

「うん、そうかもしれないけど、私は嫌やね。名前で呼んで、優衣でよかけん」

ビアンカとルージュは顔を見合わせる。

『マスターがいいなら、そうするのです』

『そうね』

父は「お父さん」、母は「お母さん」、晃太は「晃太」と呼ぶことに決まる。

まず、第一の議題終了。

「では、次やね」

リーダーさん達が心配していたことだ。

「これからビアンカとルージュを狙って、変な連中が絡んでくるかもしれないってことやね」

晃太が花を膝に抱える。

『心配ないのです。すべて排除するのです』

『そうね。私の気配感知に引っかからずに近づくことはできないわ』  
頼もしいけどさ。

「あのさ、できるだけ穏便にお願い」

ルージュの気配感知は、向けられる害意とかがわかるらしい。ビアンカも近距離ならわかること。近距離といっても半径百メートルは確実にわかるようだ。よくわからないけど、すごいんだろうなあ。スナイパーも真っ青なのかな。

「向こうがこちらに明確に手を出してきた時に守ってくれたらいいけん。あくまで防御よ、絶対に殺したらいかんけんね」

むー、みたいな顔をするビアンカとルージュ。

『人限定なのですか？』

『魔物は？』

「魔物？ あの熊とかゴブリンやね。あれは、いいかなあ。向こうが仕掛けてきたら迎撃オツケーよ」

にまあ、と笑う二匹。怖かあ。

「次は冒険者ギルドやね。私はみんなのために登録するけん、晃太も登録してん」

「え、嫌や」

逃さんよ。

「私一人は嫌よ。身分証代わりに登録してよ」

「えー」

結局、父と母が晁太を説得。しぶしぶ了承。

第二の議題も終了。

「あとはこれからのことや。ねえ、お兄さんのいる場所って遠い？」

そう、以前ビアンカとルージユにこれからどうするか聞いた時、東にいるお兄さんを頼るつもりだと言っていた。

『なんのことなのです？』

「いやいや、東にいるお兄さんを頼るって」

『あ、もういいのです』

軽っ。ビアンカがあっさり言う。

『そうね、もういいわね』

ルージユまで。

「いやいや、お兄さんだよね？」

『まあ、仕方なく頼ろうとしていただけなのです。ユイの従魔になったからもう大丈夫なのです。もう少しでお乳も出そうなのです』

あ、良かった。

『そうねえ、お乳のためと子供達を守るために仕方なく移動していただけなの』  
どんなお兄さんなんだろう？

「ちなみにお兄さんはウルフ？ ジャガー？」

『私と同じフォレストガーディアンウルフなのです』

きつとビアンカより大きなもふもふに違いない。

「一応、行ってみん？ 私もご挨拶とが必要じゃないかね？」

『まあ、そのうち、行ってみてもいいかもしれないのです』

あまり乗り気じゃないビアンカ。

「姉ちゃん、それは今度にしよう。別の問題があるやん」

「そうやね。なら、最大の問題や」

そう、路銀だ。

「あの熊、いくらになるかやねえ」

ビアンカとルージユと出会った時に倒した巨大熊を思い出しながら、うーんと腕組み。

『私が傷を付けた、あの四角の木の塊かたまりのせいなのですか？』

ビアンカが心配そうに聞く。いや馬車の傷だけの問題やなかったしね。それを理由にあの感じの悪いギルド職員がかわいか仔達を巻き上げようとしたから、対抗しただけ。後悔してないし。

「大丈夫よ、心配せんでも。熊がお金になるしね。ただね、次からは驚いてもやめてね。特に他人のものに傷をつけたり、壊したりは。先に私に聞いてね」

『わかったのです』

『わかったわ。でも、人間の世界では、生きるためにお金が必要、だったわね』

「まあ、そうね。自給自足とか物々交換とかあるけど、基本的にお金が必要やね。元氣達のミルクを買ったり、私達のご飯の材料を買ったりするのに、どうしても必要やね」

スキル『異世界への扉』は、ルーム内にある液晶画面に表示されている行き先に触れると扉が現れる。その扉は画面に表示された行き先——日本にいた時に利用していたスーパ―や手芸屋さんに繋がっていて、そこでの購入品が私達の生活を支えてくれている。ただし、『異世界への扉』を使用する際、私は魔力を消費するし、そこでの買い物にはこちらの世界での現金が必要だ。

すると、ビアンカとルージュがいいことを思いついたように言う。

『なら、お金になる魔物を狩るのです』

『そうね。あの熊がお金に替わるなら』

「待つて、衰弱者がなんば言いようと、ダメよダメ。一人になにかあつたら元氣達はどうするん？」  
ちらっと元氣を見ると、ピンクの舌をちょこつと出したり、引つ込めたりして寝ている。

あ、動画撮れば良かった。

『でも、必要でしょう？』

「それはそうだけど」

『体調はかなりいいのです。今ならあの熊くらいなら後れは取らないのです。元氣達のミルクのためなのです』

狩りをするど主張するビアンカとルージュ、危険なことはさせたくない私達。

押し問答の末、明日の熊の買い取り価格次第で、どうするか決めることにした。

熊が高値で売れたなら、このコテージの宿泊を延長し、ビアンカとルージュの体調回復を図る。

もし、低価格なら次の街に移動して、『異世界への扉』を使って手に入れた蜂蜜等をその街の商人ギルドで買い取ってもらう。移動の際は、買い取ったあのSランクの馬車をビアンカが牽いてくれるという。

「姉ちゃんがビアンカに乗って移動すればいいやん」

「張り倒すよ」

晃太はきつと有名な映画のワンシーンをイメージして言っているのだろうが、不可だ不可。私は自信がある。ビアンカの背中に乗っても、ビアンカが発進したら私だけ空中に残され、落下する自信が。うん、バラエティ番組みたいなことになりそうや。

「とにかく、明日、ギルドに行くよ。話はそれからや」

どうか熊が高く売れますように。

次の日、家族総出でギルドに向かう。

登録とかがあるからね。

申し訳ないけれど、元氣とコハクにはリードをつけさせてもらった。コハクは念のため、元氣は走り回るから必須だ。母が簡易のリードを作成。もちろんビアンカとルージュの許可も貰った。

「急に飛び出したりしたら危ないけんね」

ないとは思いたいだが、知らない人に飛びかかって転ばせたら大変。お年寄りや小さな子供、だった

ら大怪我だ。それに、馬車の前に飛び出したりしたら、大惨事だ。

『いいのです。元気は力の使い方がまだわかっていないのです』

『そうね。コハクも急に走り出すから』

元気のリードは晃太、コハクのものは父が持つ。花は母の抱っこ紐の中だ。ルリとクリス、ヒスイはそれぞれ自分の母親にぴったりくっついていいる。

ビアンカ達と一緒にのせいで、ものすごい注目を浴びながらギルドに向かう。とはいえ昨日よりましかな。

やはりリードをしていて良かった。途中で小さな子が「わんわん」とぼてぼて近寄ってきたものだから、元気が反応。

「わんっ」

全力で飛び出しそうになり、慌てて晃太がリードを引いた。子供は母親が抱える。危な。

子供の母親は平謝りだ。こちらも平謝り。元気の飛び出す力が思ったより強かったのか、晃太が後ろで「肩、肩」と言っている。

そんなこんなでギルド到着。

私と晃太は冒険者登録をするため、二人で相談窓口に。父と母は待ち合い室みたいなところで、待つてもらう。

「あの、すみません。冒険者登録をしたいのですが」

窓口の女性はスマイル炸裂。でも、あぶらあせ脂汗が浮かんでますよ、お姉さん。プロやね、プロだ。

「お待ちしております、ミスサワ様」

さっと書類を出す。

「まず、こちらにお名前を」

お姉さんが丁寧に説明してくれる。

私達のように身分証がない人間が、冒険者になることは少なくない。ただ、ギルドに登録し身分を保証されると同時に人头税を払う義務が発生するため、冒険者登録をした国に、自動的に所属することになる。つまり、ここアルブレンはユリアーナ国内なので、私と晃太はユリアーナ国民となる。

冒険者ギルドに所属すると、カードが発行される。発行には二千ギルドGが必要。もし紛失したら再発行には一万ギルドG取られる。

ランクはHからSSSまで。ランクによって、最低限、依頼を受けなければいけない期間と回数がある。Hは一ヶ月に一回以上。Gは二ヶ月。Fは三ヶ月。Eは四ヶ月。Dは半年。Cは一年。Bは二年。Aからはその決まりがなくなる。本当に身分証だけのために登録することを避けるためらしい。

ランクが低い人や身分証が欲しくて登録する人は、薬草を摘んだり、町の雑用したりして義務を果たす。ちなみに依頼を受けないまま期間を過ぎると、ギルドカードが失効となり、再登録料は三千ギルドG。これはどんな理由があっても例外はない。

パーティを組むには、Fランク以上の人が最低一人はメンバーに必要。本人の同意なくパーティ

に組み込むことは禁止、無理な引き抜きは禁止。パーティ間のトラブルにギルドは関与しない。もし一方的な言いがかりをつけられた場合はギルドの相談窓口へ。内容を吟味して対応しています、とのこと。

もし、他人のギルドカードを使つて、別人に成り済まして依頼を受けようとしたら、即資格剥奪<sup>けいごう</sup>。パーティで依頼を受ける場合は代表者が依頼料を受け取るか、もしくは取り分を決めてから受け取ること。

ギルドカードにはなんと電子マネーの機能もあり、ギルドが提携している宿や店で使用できる。確かお店に小さな水晶あったな。あの水晶で電子決済をするらしい。

それからギルドカードにはそれぞれの魔力が登録されているので、他人は使えない。だから他人のカードで依頼を受けようとしたら、支払いをしようとしても、すぐにバレること。安全面はバッチリだ。

「あと、こちらのギルドカードで人头税も支払えます」

改めてユリアレーナの身分証を取得しないと、ギルドカードから引き落とされるとのこと。人头税は、前年の冒険者としての収入を基に算出される。引き落としの一ヶ月前にいくら引かれるか通知が来るらしい。もし、ユリアレーナの身分証を取れば、そちらから引かれる。扶養家族がいると、人头税の額が変わる。両親は晃太の扶養になることに。両親が身分証を取らない場合は、晃太のギルドカードから両親の人头税が引かれる。

「簡単ですが説明は以上です。もし、わからないことがあれば相談窓口へいらしてください」

「はい」

差し出された書類に必要事項を記入。

「あの、従魔の登録はどうすれば？」

「こちらにご記入ください」

フォレストガードイアンウルフ、その仔三匹。クリムゾンジャガー、その仔二匹。

「ありがとうございます。では、カードを作成するためにお時間をいただきます」

「はい」

「終わりましたらお呼びしますので、待ち合い室でお待ちください」

「はい」

お姉さんはスマイル。

さて、待ち合い室に行こうとすると、昨日、熊の査定をお願いした男性職員さんが声をかけてきた。

「ミズサワ様、ナーダリーグリスリーの査定が終わりました」

「あ、はい。晃太、お父さん呼んできて」

「ん」

両親とピアンカやルージュと、周りの人とは一定の距離がある。

晃太と呼ばれた父がよっころしょっと立ち上がり、こちらに来る。

買い取り窓口に行くと、さっきの男性職員が座っていた。

「では、早速ですが、毛皮は八十万Gです」

「おお、いい額だ。剥製はくせいにされるのだろうか。」

「肉は傷や破裂がありましたので、合計三百九十万G。残念なことに肝きもが破裂しておりましたから。これが無事ならプラス六十万Gになりましたが、この状態では買い取りは不可能でした」

上空から墜落死させたから、内臓が破裂したんだね。」

「魔石はかなり質のいいものでしたので百三十万Gです。これだけの大型魔石ですからね」

魔石とは、魔物の心臓の横にある石で、魔物のレベルによつて質が変わる。主に魔道具の燃料になるらしい。ディレナスでお世話になった騎士のディードリアンさん情報です。」

「最後に討伐料です」

「と、討伐料？」

「はい。Aランク以上の魔物の場合、討伐料と報告義務が発生します。討伐料はその魔物のランクや被害状況、討伐されなかった場合に予想される被害等を考慮し支払われます。あれだけの大物です、もし人里近くに出たら被害は甚大じんだいですからね」

もし、あの熊を討伐するとしたらAランクパーティがいくつも必要と、『鷹の目』のリーダーさんも言っていた。

「今回も討伐依頼が出る時には、すでに犠牲者が出ていた可能性があります。更にあれだけランクの高い魔物だと、冒険者にも犠牲が出たことでしょう」

「へエー」

私は冷や汗が出そうだ。

その熊を一撃で倒せるのが後ろにいるよ、一匹も。いや、今の健康状態だと後おれは取らない、だつて。どちらにしても怖かあ。父は表情を変えない。

「討伐料は三百万G。合計九百万Gです。解体料を引いて、八百五十万Gのお支払いとなります。今お作りしている冒険者カードに入金できますが」

「カードへの入金って、あとでもできますか？」

父が質問。

「はい、冒険者ギルドカードでしたら冒険者ギルドで入金、出金できます」

「なら、あとで入金しますので一旦現金でお願いします」

「はい。承知しました。大金貨でよろしいですか？」

「はい」

カウンターにさつと並べられる大金貨八枚、金貨五十枚。

金貨一枚が一万G、大金貨は金貨百枚分だ。確認し、受け取りの印として書類にサインをし、魔力を流して父がアイテムボックスに入れる。

ああ、良かった、これでしばらくお金は大丈夫だ。

私はなにげなく聞いてみる。

「もし、被害が出てたら、討伐料ってどうなりますか？」

「……一千万は下らないでしょうね」

「被害、出なくて良かったです」

「そうですね」

ヒスイが腕を食べられたけどね。ビアンカとルージュも重症だったけどね。

ちなみにもしAランク以上の魔物と遭遇後、報告義務を怠るとかなりの罪状になるそう。特に冒険者はその危険性をわざと見逃し、他人の生命をおびやかしたとみなされ、下手したら一発で重罪奴隷おちだという。これは当然のこととして、一般生活に根付いている。

さて、これでお金はなんとかなった。しばらく、あのログハウスの宿泊を延長して、ビアンカとルージュの体力回復に努めよう。

男性職員さんにお礼を言って、待ち合い室に戻る。

「どうやった？」

母が抱っこ紐に入っている花を抱え直して聞いてくる。

「しばらく生活は大丈夫や。とりあえずあのログハウスを今月いっぱい延長しよう。ずっと移動しとつたから、休憩もかねてしばらくゆっくりせん？」

「いいね。そうしようかね」

こうしてアルブレン滞在が決まった。

ほどなくして、呼ばれる

「新規冒険者ギルドカード作成の方、お待たせしました」

私と晃太が腰を上げる。

カウンターに向かうと、若い男の子三人、女の子二人がいた。

受付のスマイルお姉さんがカードを出す。電子マネー機能の付いたカード。なんだかすごい技術。これはなんでも、何百年か前にダンジョンから発掘された魔道具をコピーして作られた技術らしい。基本的に魔道具は、ダンジョンから出たアイテムの知識を利用して作られている。なので、父のように一から作る技術者は少ない。なんてつたつてダンジョンから出てきたのを、いじるだけらしいから。

「では、こちらに魔力を流してください」

早速昨日覚えた魔力を流す方法を実践。案外簡単だ、脈を感じたらできる、という父の一言でできた。私は自分の脈を触知しながら、カードに指を当てる。心の中で魔力魔力と念じると、カードに私の名前が浮かび上がった。

ユイ・ミスワ ランクH ユリアレーナ

従魔 フォレストガーディアンウルフ 成体一体 幼体三体

クリムゾンジャガー 成体一体 幼体二体

良かった、できた。ちよつと感動。晃太もできたようだ。

さ、今日はこれで帰ろうかな。

「ねえ、お姉さん」

声をかけられた。一緒にカードを受け取るために並んでいた男の子の一人だ。

「なに？」

「あの二匹、お姉さんの従魔？ 超かっこいいんですけど」

男の子はキラキラした目で聞いてくる。うん、純粹にそう思っているようだ。ピアンカとルージュは、微動だにしない。

「そう？ ありがとう」

「いいなあ、あんな強そうなのいて」

キラキラ目の男の子を、別の男の子がよせよ、と止める。

「ほら、薬草摘みに行こうぜ」

「あ、わかった。お姉さん、今度従魔触らせて」

キラキラ目の男の子は、他の男の子と女の子達と一緒にギルドを出ていく。冒険者登録をしてすぐに薬草摘みとは、ヤル気満々だね。頑張りなさい、少年少女よ。

私達も失効しない程度になにかしないと。

「姉ちゃん、ちよつと掲示板見とかん？」

「そやな」

晃太も同じように思っていたのか、早速依頼が貼られた掲示板を指した。

「なにがあるかだけでも、見どころか」

掲示板に行こうとしたその時、そこそこの年齢の男性ギルド職員が慌てた様子でこちらに駆け

寄ってきた。

「あの、ミスサワ様。昨日は当ギルド職員が大変失礼なことをしました」

昨日？ あ、馬車の件かな？ ギルドで借りていた馬車に傷をつけてしまったので修理代を払おうとしたら、修理不可能だからと買い取りを迫られ、拳げ句、元氣達を売るよう仕向けてきた件。結局、五千万G払って馬車を買ったけれど。

「その件を含め、ミスサワ様にお願ひしたいことがあるのです。昨日の今日で大変失礼かと思いますが、話だけでも聞いていただけませんか？」

「なんだか必死な様子。」

「どうする？」

晃太に尋ねる。

「姉ちゃんに任せるばい」

「どうしようかな？」

馬車を返してなんて言われたら困る。実は昨日、馬車をどうするか決めたのだ。

私達が使っていた座席を取り払い、後ろの荷台と繋げて広くすることにした。広くしたら元氣達がゆっくり寛げると思ったのだ。更に、もへじ生活でラグやソファなんか揃えて設置しようなんて話をしたばかりだ。

よし、ここはしっかり馬車は返しません、という態度で望もう。大事な移動手段だ。

「では、話だけ」

家族全員でギルドの応接間に移動した。

ビアンカとルージュが歩くと床がミシミシいつてますけど、大丈夫？

通りすがりの職員さんはプロ意識全開で、廊下を譲ってくれた。脂汗、浮かんでますよ。

応接間はなかなか広くて、ビアンカとルージュも入れた。花は母から晁太にバトンタッチ。五匹の仔達は部屋の匂いを嗅いで歩き回る。

「お時間をいただき、ありがとうございます、ミスサワ様。私はこのアルブレン商人ギルド、買い取り主任のバーズです。昨日は当商人ギルドの職員が失礼な態度を取りまして申し訳ありません。件の馬車につきまして、正式な買い取りとして手筈を整え、差額をお返ししたいのです」

深く頭を下げるバーズさん。

やっぱり適正な価格じゃなかったんだね。お金が返ってくるならいいか。必要だしね。

了承の旨を伝えると、すぐに返却手続きがされる。

返却額は三千万G。てことは馬車の売却価格は千五百万Gなんや。支払い額の五千万からあの男性が提示した元気達の金額——合計額四千七百万を差し引いた額が馬車の買い取り額だと思っただけ。

それでも普通は五千万なんてすぐに揃えられないし、ぼったくりや詐欺や。

そうだ、昨日対応したあの二人はどうしたんやろう？ お説教では済まされていないはず。いや、どうでもよか。

「あの、お話とは？」

馬車の話を含めてお願いしたいことがある、ということだったから、他にも用件があるのだろう。

「はい、実は、ビーランの商人ギルドのボナさんから、くれぐれもミスサワ様に失礼のないように、と連絡が来ていました」

「ボナさんから？」

「はい」  
なぜ？

旅の途中で通過した国マーラン。その国境の街ビーランで、巧みな話術で晁太のアイテムボックス内の毛糸や布すべてを買い取り、試飲したワインを大変喜んでくれたボナさんの姿が浮かぶ。

バーズさんの説明によると、ボナさんはつい最近までマーランの商人ギルド全体の代表を務めていたが、高齢になったため故郷のビーランに戻り、たまに商人ギルドで嘱託職員として働いているらしい。ただ、嘱託職員とはいえ、何年も商人ギルドの長を務めた人だ。査定や鑑定の技術で叩き上げた人にただの下っ端仕事をさせるわけもなく、買い取り主任を任されているし、その名は隣国アルブレンの商人ギルドにも届いている。

そんな人から、くれぐれも失礼のないように、なんて連絡が来ていたのに、昨日のあれだ。

「ボナさんはなんと？」

「失礼のないように、とだけです。ただ、あのボナさんが失礼のないように、などとわざわざ連絡をする方々です。勝手な推察で恐縮ですが、ミスサワ様は良質な交易品をお持ちではないかと」

私達は顔を見合わせる。

「本当に勝手だと思われるでしょうが、我々ともお取り引きしていただけないでしょうか」  
それは渡りに船だけだ。

「——やはり、虫のいい話ですよね」

バーズさんは額に浮かんだ汗を拭く。

「ちよっと、待ってください」

こそこそ家族会議。

「どうする？」

こそこそ、こそこそ。

「——あの、買い取りしていただけるなら、こちらありがたいのですが、一つお願いがあります」  
「なんでしよう？」

「腕のいい、信頼できる馬車職人を紹介してください。実はあの馬車を改修したくて」

「馬車職人でございますね。承知いたしました。職人ギルドに確認を取りますので、お待ちください」

バーズさんが一旦退室。

それを見送って、ホッとする。

良かった。馬車を返してくれ、とかじゃなくて。そしてボナさんに感謝。ワイン効果かな？

『あの四角の木の塊をどうにかするのですか？』

「そうよ、広々と使えるようにしようと思ってる」

ビアンカは元気のリードを足で押さえている。

「姉ちゃん、どれ出すと？」

「そうやね。まず蜂蜜とメープルシロップやね。布と刺繡糸は聞いてみて、毛糸もやね。確か、アルプレンの北にワインの産地があるから、そのへんはやめとこうか。どうかね？」

私は父と母に確認。

「任せるよ」

一任されました。

しばらくして、バーズさんが戻ってきた。

「お待たせしました。馬車職人については職人ギルドの職員がご案内します。ところで、買い取り品はどういったものがございますか？」

「蜂蜜とメープルシロップです。私達はここでどういったものが好まれるかわかりませんので、今、出せるのはこれくらいです」

「他にもございましたら、品目を教えていただけると助かります」

「布、刺繡糸、毛糸があります」

「香辛料などはありませんか？」

「香辛料？ 胡椒とかですか？」

「そうです、お持ちですか？」

バーズさんの目が輝く。

「多少はありますが……」

香辛料は管理が厳しいんじゃないん？ どこで手に入れたのか追及されると困る。

「実は香辛料の最大輸出国のディレナスで大変な厄災やまひが起きてます。おそらく今後数年間、香辛料の価格が高騰こうとうしますので、少しでも確保しておきたいのです」

華憐達が引き起こしたあれか。薬草だけじゃなくて、香辛料も打撃を受けたんだ。

ならば通わなくてはディレックス。確かあったはず。挽ひいていない、そのまんまの胡椒こしを見たことある。

「二、三日待つていただけますか？」

「はい、買い取りさせていただけのなら」

とりあえず、三日後改めて伺うことに。今出したら、元気達がなにかやかしそうだしね。バーズさんもわかってくれた。

「では、馬車職人の工房までご案内します」

職人ギルドの男性職員さんが、馬車職人の工房まで案内してくれた。

父と母は花とともに先に帰ってもらう。

「こちらです」

馬車職人の工房は大通りから少し入ったところにあった。

途中、ちらちらとピアンカとルージュが見られたけど、当人はまったく反応しない。

工房の人に引き合わせてくれる。

無精髭むじょうひげのある工房主は、こちらをちらつと見て、びっくり。ピアンカとルージュね。

「ミズサワ様です。馬車の改修依頼です。お願いします」

「わかった。伺おう」

「ありがとうございます」

案内してくれた職員にお礼を言う。

男性職員さんが、会釈えいせきして帰っていく。

「ミズサワです、よろしくお願いします」

「僕わしがこの工房主のカルロだ。では、改修する馬車は？」

「晃太、出して」

「ん」

晃太がアイテムボックスから、馬車を出す。

「おお、すごい容量のアイテムボックスだな」

カルロさんが感嘆の声を上げる。

「まず、ドアの修繕。あと、馬車の中を後ろの荷台と繋げて広くしたいんです。できますか？」

カルロさんは馬車の周りをチェック。中もチェック。

「できる。ただ、このドアは付け替えが必要だ。中は座席を取り外して、後ろの荷台と段差がない

ようにしたほうがいいか？」

「はい、お願いします」

「床板は厚いほうがいいか？ このちびどもを乗せるんだろ？」

カルロさんが、他の馬車職人さんにじゃれついている元気を見て聞く。

「そうですね」

「少し値が張るが、トレントの床板はどうだ？ ツメ研ぎをしても、そうそう剥はがれることはない」

あ、そうか、猫系ならツメ研ぎをするか。猫を飼った経験はないけど、コハクとヒスイがそのうちするかも。

「どうする？」

晃太に尋ねる。

「任せるばい」

「なら、お願いします」

「わかった。じゃあ予算の話だな。まず、ドア一枚、内側にトレント木材使用、二十万。座席取り外し、床と壁はトレントを使用で二百九十万。まあ、ギルドの紹介だ、きっかり三百万Gギルド」

適正価格かわからないけど、商人ギルドを信用しよう。

あの熊、いい金額で売れて良かった。

「はい、お願いします」

「じゃあ、手続きするか。おーい、契約書を作ってくれ」

カルロさんが大きめの声を上げると、奥から中年の女性が出てきた。カルロさんが指示し、書類作成。

「これが預り証の木札。もし、作業途中で大幅に改修費が上がリそうな場合は、まず使いを出してどうするか確認を取る。商人ギルド経由でいいか？」

「はい、大丈夫です」

「そして料金だが、一括前払いか、半額を前払いか、出来上がり時に一括支払いだ。もし差額が出れば、引き渡しの際に精算する。どうする？」

「半額前払いで」

「わかった。もし追加したい作業がある場合や、改修自体をやめたい場合はすぐに連絡をくれ。あと、改修期間は一週間を予定する。まあ、二、三日は余裕をみてくれ。出来上がったら使いを出す」

「はい」

「じゃあ、契約のサインと魔力。まず、儂わが、よし。ここにサインと魔力を」

「はい」

内容を確認する。大丈夫のようだ。サインして魔力を流す。

「よろしくお願いします」

「こちらこそ。で、あのウルフ、触ってもいいか？」

カルロさんがウズウズしながら聞いてくる。

額く前に元気がカルロさんに飛びかかった。